

# 私の治療家人生を 振り返って



村松輝久

## [はじめに]

私は、鍼灸の免許を取得してから今年（2023年）で45年になります。そして古稀を迎えようとしています。東京の治療院での足かけ5年の勤務を終え、北京での2年間の留学を経て、鹿児島市内で開業してからも既に38年を経ようとしています。思い返せばあつという間に過ぎたような気もしますが、人と多少異なるいろいろ貴重な経験をしてきたとも思います。古稀を前にして自分の通ってきた道を自分自身が確認したいという思いと、後進の方々にも何かしらの参考になればと思い、順を追ってまとめみることにしました。

## [治療家をめざしたきっかけ]

私は小学校5年生から高校3年生まで、水泳部に所属していました。特に静岡県立浜松西高等学校の水泳部では、“フジヤマのトビウオ”と呼ばれたあの古橋広之進氏(当時は浜松二中)のずいぶん後輩に当たりますが、おそらく歴代でも最も泳ぎが遅い主将であったかと思います。当時の水泳大会では、予選と決勝の間に後輩が先輩の背中や腰を揉みほぐすという伝統がありましたが、私の揉み方が上手いということで、よく揉まされました。

2年生の後半から主将に指名され、4月から9月までの屋外プールでの練習期間が終わり、10月からは毎日7kmのランニングと1時間のサーキットトレーニングばかりで、筋肉が付きすぎて3年生の時には2年生の時のタイムを下回り、水泳選手としての限界を感じていました。当時、私はバタフライと個人メドレーの選手でしたが、胸囲は1メートル2センチ、ウエストは76センチ、太股の周りは64センチで、既製のズボンは、そのままでは履けませんでした。

高校では数学が全くダメで私立文系でしたので、給費生試験で神奈川大学の英語英文学科に入学しました。入学金3万円、学費も国立大学並みに安かったので、裕福でなかった実家は助かったかと思います。大学は横浜市にありましたが新宿区大久保の兄の経営する焼き鳥屋の近くに安いアパートを借り、毎日山手線、東横線を乗り継いで横浜まで通っていました。6畳一間の木造アパートは共同トイレでしたが、それでも光熱費まで入れると月2万円ほどかかりました。当初親からの仕送りは月3万円でしたが、その他の足りない生活費はアルバイトで稼ぐという取り決めで学生生活が始まりました。

大学入学と同時に少林寺拳法部に入部したのは、部員が皆、大学から始めた人ばかりで、水泳部での負け癖から脱却したいという思いからでした。しかし、入学直後から、胴とグローブを付けて、先輩との乱取りがあり、グローブで容赦なく顔を殴られるという怖さと痛さから猛練習しました。その甲斐があり、9月の新人戦には1年生で一人だけ団体乱取り戦に出場することが出来ました。

大学3年生の時に出場した全日本学生少林寺拳法大会では、2段以上の組演武の部で同学年の加藤（磯貝）仁君と組み、112大学112組が参加する中、第4位に入賞することが出来ました。誰よりも多く練習したという自信が結果につながったと思います。

4年間の猛練習でかなり強くなったのは実感しましたが、突き指、捻挫、打撲などの怪我也多く、いつも体のどこかが痛い日常でした。幸い少林寺拳法には剛法、柔法の他に整法というものがあり、練習後は互いに体を整えることもよくあり、そのことから整体術に大変興味をもつこととなりました。この経験が、治療家の道に進む大きなきっかけとなりました。

大学3年生の後半から、関東学生少林寺拳法連盟の副委員長に就任し、大会を実行する側の一員となりました。大会前には新聞社や文部省、総理官邸や皇室関係者のもとに出向いて後援をお願いする経験を積みましたが、学校では経験出来ない貴重な体験でした。



関東学生少林寺拳法連盟副委員長時代。慶応、明治、立教の各大学幹部たちと、東大監督の真田玉雄先生（向かって右側）

また、3年生の春休みには、文部省の外郭団体である「日英青年交流協会」という団体が募集した派遣青年の枠に応募しました。作文や2度の英語面接の後、理事長の面接がありました。理事長から、「君の特技は何かね？」と聞かれ「少林寺拳法です。」と答えると、「では、ここで見せてください。」と言われました。私は、スーツと革靴のまま、普段稽古している演武を披露致しました。当時、現役の大学少林寺拳法部員ですから気合いと迫力だけは自信があり、理事長を睨み付けるように演武を行いました。多分その演武披露のおかげで派遣枠に合格し、約一ヶ月間イギリス各地を巡り現地の青少年との交流活動を体験することになりました。

ロンドン、オックスフォード、リバプール、エディンバラなど各地の交流会で、私は少林寺拳法の演武を披露し、現地のイギリス人から大変好評を得ました。イギリス人との交流には英語の能力も必要ですが、もっと大切なのは、イギリス人が知りたくなる技術を持っているかどうかであると強く感じました。彼らは、私が披露した少林

寺拳法のことを知りたくて、私の英語の水準に合わせてコミュニケーションを図ろうとしてきました。そういう技術を持っていないければ、当時のイギリス人は東洋の島国の人間のことなどほとんど興味を持っていないように感じました。

当時の少林寺拳法ロンドン支部長からはイギリスに来てくれれば、すぐに少林寺拳法インストラクターとしてビザが取れるから、大学卒業後は是非イギリスに来て欲しいと懇願されました。しかし、鍼灸学校に進学して少林寺拳法以外の技術を取得する夢があるからと、丁重にお断りしました。今、その判断は間違っていなかったと実感しています。



ロンドンの日本大使館文化センターにて演武を披露

4年生の夏からは、就職活動は一切せず、東洋鍼灸専門学校の入試対策に没頭しました。その結果、400名余りの受験者の中から40名の合格者の中に名を連ねることが出来たのは幸運でした。

### 【鍼灸学校時代の生活】

大学3年生の頃からは実家からの仕送りを月5万円に上げてもらっていましたが、本来就職すべきところを就職せず鍼灸学校に入学したので、入学金の20万円だけ親に出してもらい、生活費はすべてアルバイトで稼いでいくと両親に告げ、自ら退路を断ちました。最初は、兄が経営していた新宿区大久保の焼き鳥屋で深夜まで働き、朝3時に食事をしてから4時頃やっと思り、8時過ぎに起きてから徒歩20分ほどの歌舞伎町にある東洋鍼灸専門学校まで通いましたが、ほぼ毎日遅刻でした。

兄の焼き鳥屋で三ヶ月ほど働きましたが、朝4時に寝る生活はさすがに体が持たないので、上級生の紹介で赤坂の「山王指圧センター」で働くことになりました。学校を終えて、夕方から夜10時頃には終える事が出来ましたが、歩合制で指名があまりつかないのでそれだけでは生活出来ませんでした。仕方なく、深夜に兄の紹介で出張治療を始めました。治療は山王指圧センターで教えてもらったツヨモミの指圧術と4月から通い、後に師匠となる阿部昇弘（のぶひろ）先生が主宰されていた整体術（太陽創健法）の講習会で会得した手技療法でした。当時、治療免許は何もなく出張マッサ

ージの会社にも属していませんでしたが、焼き鳥屋でバイトしていた時のお客さんの口伝で少しずつ深夜のお客を増やしていきました。

鍼灸学校1年生の8月の頃には、学校で覚えた鍼治療も加えていきましたが、あの当時指圧整体をした後、腰痛などには灸頭鍼をよく使った記憶があります。深夜12時を過ぎる往診も多かったので、昼の授業中は眠くて、特に鍼実技の時間には本来1時間ずつ交代するのですが、私は2時間ともモデル役になっていました。私と組んでいた級友は普段あまり人に刺す機会がないようで、喜んで2時間ずっと鍼を打ってくれていましたが、私はほとんど寝ていました。

深夜の大久保の街は面白いところで、1年生の2学期頃のある日、焼き鳥屋の常連さんから往診に来てほしいと連絡があり、深夜11時頃、指定された場所に行きました。派遣マッサージの仕事をしていると聞いていましたが、家の中に入ると4、5人の若い女性が暇そうに麻雀をしているのが目に入りました。すぐにその常連さんの治療に取りかかりました。治療しながら、「出張マッサージのあの人たちに治療してもらったらどうですか？」と聞くと、「いや、あの娘たちはマッサージが出来ないから。」と事もなげに言います。その頃、その方面には詳しくなかった田舎出の私には意味不明でした。

鍼灸学校2年生の頃は、山王指圧センターや兄の焼き鳥屋のバイトもやめて、出張治療の収入だけが頼りの生活となりましたが、私の人生の中で、最も生活するお金に困っていた頃であったかと思います。ひどい時には、冷蔵庫には何もなく、財布にも小銭が入っているだけで夕食の当てもないことがありました。私は考えた末に、思い切って患者さんの家に電話して、「今日は時間がとれるので出張治療が出来ますが、いかがですか？」と治療の押し売りをすることもありました。向こうも気の毒に思ったのか了解してくれて、奥さんと二人治療をすることもありました。帰り道は、空腹だったものの充実感がありました。二人分6千円の治療費を懐に入れ、遅い夕食をしたことは今では懐かしい思い出です。当時は本当に重い金欠病患者でした。

そんなある日、いつものように学校を終え、日もまだ明るい午後4時頃、家への近道の新大久保から大久保に向かう裏道を通っていました。そこは10軒ほどの所謂「連れ込みホテル街」でした。その時、こちらを見て、40歳前後の女性が必死の形相で走り寄って来たことがありました。素人の普通の女性に見えましたが意を決したように、「お兄さん、遊んでいかない？」と言ってきましたが、緊張から声が震えているように感じました。その切羽詰まった表情から、本当にお金に困っているんだなと思いましたが、こちらも負けず劣らずの貧乏学生です。「すいません！私も学生でお金がないんで。」と言って逃げるようにその場を立ち去りました。その時、お金がないと人助けも出来ないなど強く実感しました。もっとも「人助け」という言葉には若干ウソがあるかも知れませんが・・・。

3年生の頃には、按摩マッサージ指圧師免許も取得し、堂々と出張治療をしたせいか、毎月12万円くらい稼ぐことが出来ました。3年間で遅刻せずに学校に行けたのは1週間くらいしかなかったのですが、卒業時には最優秀学生に贈られる「神戸賞」を受賞し、四世鍼師、神戸源蔵先生手作りの金鍼20本も副賞として頂きました。その金鍼は当時1本2000円の高価なものでした。遅刻常連の私が受賞出来たのは、学生自治会長だった私が務めた東鍼祭実行委員長としての働きや、当時各県で実施されていた鍼灸師試験の宿舎や引率の先生などの手配を学生自治会がすべて取り仕切って行ったことへの功労賞の意味合いが強かったのだと思っています。



「東鍼祭」実行委員長として挨拶

### 【阿部治療院での修業時代】

鍼灸学校1年生の時の5月から、先輩の紹介で、阿部昇弘（のぶひろ）先生が主宰する「太陽創健法」講習会に参加することになりました。阿部先生は高名な整体師で、教え方も上手でしたので、毎月2回、学生時代の3年間真面目に通いました。そのご縁で卒業後は築地市場厚生会館2階にあった阿部治療院で働けることになりました。

阿部先生が東京都の建物であった厚生会館で開業出来たのは、治療家になる前に、ずっと築地市場の競り人をしていたからですが、市場で働く人たちの健康管理に役立ててもらいたいということで築地市場組合から依頼されたようです。競り人の頃、膝を痛め、競り台に立てなくなった時に、阿部先生の師匠で、太陽創健法創始者であった宮國朝輝（ともてる）先生に膝を治してもらったのが治療家を目指したきっかけであったと聞いています。厚生会館は東京都の建物ですので、外壁に看板を付けることが出来ず、二階の治療室の入り口に横20センチほどの「治療室」と書いた板が張ってあるだけで、外から厚生会館を見ても阿部治療室があるのか全くわかりません。私が入所した年には、そんなわかりにくい治療室に、毎日40名くらいの患者さんが来ていました。しかも、その半分は東京都外から来ており、関東近県はもちろんですが、遠くは福島、山形、広島などからも来院していました。ほぼすべてがロコミ、紹介の患者さんたちでした。当時の東京では基本的に鍼灸の保険は適用されず、すべて自由診療であったので、一日10名の患者さんが来院すれば、大変はやっている治療院と言われた時代でした。その頃に1日40名の患者さんが来るということは信じがたいことでありました。私が勤務していた4年半の間は平均で40名、多い日は70人以上来院

者があったときもありました。患者さんは築地市場に働いている人たちがメインであるはずですが、実際には市場関係者は2割もいなかったのではないかと思います。客層も主婦、会社員だけでなく、現職大臣を含む政治家、日本経団連の役員、俳優・歌手等の芸能人、プロ野球・大相撲等のプロスポーツ選手などテレビで見かける有名人が毎日のように来院されていました。

私は、入所したときには一応生活出来るお金は出張治療で稼いでいたので、当面无給勤務でも構わないと思っていました。初任給として5万円頂けたので、7万円分だけ出張治療で稼げばよいと安心した記憶があります。しかし治療免許を取得しておりましたし、講習会も3年間頑張ってきたせいか、意外と昇給も早く、



阿部昇弘先生の助手として「太陽創健法」講習会を手伝う(1983年1月)

入所1年で12万円頂けました。その時点で出張治療は原則すべてお断りしました。そして私の治療を受けたいという往診の患者さんには築地の治療院に来て頂きました。

入所4年目で結婚をし、それを機に独立開業を考えましたが、別の環境でもう少し腕を磨いてからの方がよいのではと考え、中国留学を試みることにしました。5年目には私を指名する患者さんだけでも毎日7,8人と増え、給料も入社当初に比べてかなり昇給していたので、それ以前からの積み立てと退職金を当て込み金銭的には何とかなるという状況でした。

しかし中国教育部(文部省)を通しての基準に合格して留学するには、日中友好団体からの選抜、推薦と中国関係者の推薦文が必要でした。そこで戦前から30年以上中国で暮らし、帰国していた作家の伊藤克さんに推薦文を書いて頂き、その伊藤克さんから更に「日中青少年援護協会」という団体を紹介してもらい、推薦枠5人の中に滑り込みました。ただ、一緒に留学して漢方薬の勉強をするはずだった薬剤師の妻は直前に妊娠がわかり、私一人での留学となりました。

## [北京での留学生活]

留学1年目は、まず中国語で各大学での授業が受けられるように、北京語言学院での中国語の特訓から始まりました。留学時点での中国語のレベルに合わせてクラス分けが行われ、初級レベルの私は本当に初歩から教えられました。15人ほどのクラスに

は 10 カ国からの留学生が混在していましたが、日本人は私を含めて 3 名でした。授業は午前中だけでしたので、午後はなるべく日本人以外と付き合い、日本語を話さない環境に身を置くようにしました。

ある時、学校の空き地で一人少林寺拳法を練習しているところをアフリカ



北京語言学院での早朝太極拳 (1983 年 9 月)

からの留学生に見つかり、ザイール (現在はコンゴ) の留学生を中心に週 1 回だけ少林寺拳法を教える事になりました。当初の会話はすべて英語でしたが、半年後にはほぼ中国語での会話となりました。北京語言学院の先生によるとアフリカ人留学生は耳が良くて一番早く中国語会話を覚えるとのことでした。



アフリカの留学生たちに少林寺拳法を指導

留学生宿舎で最初に同室となったのはアイルランドからの留学生でしたが、英語が少し出来るということで、日本人ながら私が選ばれたのだと思います。彼とは 2 ヶ月間は英語のみの会話で、3 ヶ月後からは英語と中国語がチャンポンの留学生英語に変わっていきました。その頃には私が治療家

であることが知られはじめ、特に欧米からの留学生から治療してほしいという依頼が増えていきました。私が治療費を取らなかったことと、英語が多少出来たことも原因でしょうが、私が鍼灸学校卒業後、阿部昇弘先生の下で腕を磨き、それなりの技術を身に付けていたからだと思っています。また、語言学院内で無料往診をはじめたのは、治療が好きで治療勘を失いたくなかったこともあります。各国の留学生と交流して知見を広めたいという気持ちもありました。

もちろん日本人留学生の治療もよくしました。たしか 20 代前半の男子留学生が発熱して薬を飲んでも熱が下がらないから見てほしいと頼まれたのが最初だったかと思います。その学生の部屋に入ると意識朦朧としてうなされるように寝ていて、友人が 3

人ほど心配そうに付き添っていました。脈は浮、弦、数で顔が真っ赤になっており、熱は38.8度もありました。顔に熱が上がっているのが陽明の邪熱と判断し、三稜鍼がなかったので太めの縫い針を借りて、両方の陽明大腸経の井穴（人差し指の爪の根元）である商陽穴に素早く刺して血を数滴絞り出しました。すると5分ほどで患者の呼吸が落ち着いてきて意識もはっきりして来て、一言「すごい！」と言うのが聞こえました。そして「鍼（実際には縫い針）を打ったらすぐに頭がスーとしてきて楽になっていくのがわかった。」と言ってくれました。30分ほどで37.5度まで下がり、翌日には平熱にもどりました。それからその学生と校内で会うたびに、「鍼はすごい！」と言ってくれましたが、彼にとっては初めての鍼治療であったようです。

留学後半年くらいになると、授業が終わる午後からは毎日のように往診の予約が入り、多いときには4、5名治療することもありました。この時点で、自分の勉強時間を考え、少しずつ往診を減らしていきましたが、往診の副産物として良いこともありました。往診を始めた頃に、アメリカのサンフランシスコから留学していた「タン」という名の中国系アメリカ人を治療する機会がありました。サンフランシスコで3つのエアロビクスのジムを開いていた青年でしたが、祖父は広州の出身で、北京中央バレエ団に遠い親戚に当たるバレリーナがいるとのことでした。「先日会ってきたがバレエ団専属の鍼の先生が大変評判がよくて、私も整体治療を受けてきて良かったので紹介してあげようか？」という話になったので、後日彼の親戚のバレリーナの宿舎に二人で訪ねて行く事になりました。

## [国立北京中央バレエ団]

その親戚のバレリーナに会ってから分かったのですが、国立北京中央バレエ団所属の、当時41歳のそのバレリーナは鍾潤良（ジョン・ルンリャン）という方で、中国では超有名なプリマドンナでした。彼女が主演の海外公演を何度もしており、英語も多少出来て、中国語も非常にわかりやすい標準語を話す明るい性格の女性でした。ご主人も民間舞踊の教師で一人娘には英語の家庭教師を付けている、当時の中国では裕福な家庭のようでした。すぐに鍾潤良先生とともに、北京中央バレエ団の王啓先（ワン・チーシェン）という専属医師兼トレーナーに挨拶に行き、とにかく来週からでも伺いたいと強く希望しました。当時、私の中国語の語学力はまだ低く、初対面の私に中国鍼や中国整体術を教えてほしいというのは我ながら厚かましいとは思いました。王先生も最初は難色を示していましたが、私の熱意に押されたのか、最後には、見学は承諾するが授業料は絶対受け取らないと言われました。金では動かないという中国人医師としてのプライドがあったかと思います。その翌週には私一人で王先生の自宅を訪ねました。しかし、授業料無しでは私の方の気も済まないなので、感謝の気持ちとして毎回お土産の品だけは持参しました。



左から留学生の「タン」君、鍾潤良先生、王啓先先生（1983年11月）

初めて伺った日、「まず、私に日本の鍼を打ってみてくれ。」というので、日本から持参した寸6の3番鍼で局所治療的に頸肩や腰部に刺したが、一言「刺激が弱過ぎる。」と言われました。次に、「手技で背中を押してくれ。」というので、日本でしていた指圧整体術を施すと、「これは、なかなか上手い。」と言ってくれたので20分くらい揉んであげましたが、その日はそこまででした。翌週もひたすら腰背部を20分ほど押し、少し話をして終わり。その後、5回目の訪問でも腰背部を押してあげて雑談をして終わり。今考えれば、本当に習いたい気があるのか、私を試していたのだろうと思います。6回目くらいの訪問で、いつものように指圧整体術をしてあげると、突然、「今から往診に行くから付いてきなさい。」と言われました。歩いて10分ほどの宿舎に行くと70歳くらいの老人がいました。彼が脳卒中の後遺症であることはすぐに分かりました。右手足が麻痺していて歩くのも辛そうでした。

王先生は2寸の28番鍼（日本の12番鍼くらい）を取り出すと右大腿部の外側あたりに1寸ほど刺して鍼を弾くような操作をすると、それに合わせて患者の足先もピクピクと激しく動きました。「これは坐骨神経を弾く操法です。私は西洋医学も学んで来たので、坐骨神経の場所が正確に分かるが、普通の鍼医には出来ない」と自慢げに話されましたが、王先生は中国の鍼医の中でもかなり強刺激の部類に入る先生であると思いました。王先生の最も得意とするのは、聾の患者の治療であると聞いていました。耳の聞こえない人を何人も治しているとのことで、実際に治療しているところを見たいと希望を出しておいたところ、数日後に、「明日聾啞患者を治療するから来なさい。」との電話があり、指定された時間に王先生の自宅に伺いました。

家に入ると、既に10歳くらいの男の子と父親が待っていました。男の子は恐怖からか不安そうな顔でうずくまっていたのですが、王先生が、「さあ始めよう。」と言って、太めの中国鍼を持ち男の子の肩をつかみました。すると、男の子は泣き叫んで猛烈に抵抗したので、父親が男の子を強く押さえつけました。王先生は、確か外関穴あたりから手足や耳の周りのツボを一气呵成に速刺速抜しました。その時間は5分ほどであったかと思います。治療が終わっても男の子はしばらく大泣きしていましたが、王先生流の強刺激の鍼治療を間近で見させてもらったのは良い経験でありました。ただし、このような強刺激の中国鍼治療は、相手が10歳くらいの子供では怖がって泣くのは無理ものないことだと思いました。

毎回、王先生のお宅を訪問した後は、鍾潤良先生のお宅にも立ち寄って30分ほど雑談する事が多かったかと思います。それは生きた中国語を習う目的もありましたが、中国の一般家庭の生活や鍾潤良先生の毎日のレッスン方法など、教室では習えない中国語が面白かったのもあります。

そして帰りのバス停近くにあった、小さくてうらぶれた店構えのワンタン屋さん立ち寄るのも楽しみでした。どんぶり一杯、日本円で40円ほどでしたが、店の外観とは裏はらにそれまで味わったこともないほど美味しいワンタンスープでした。

ところで、日中国交正常化直後の頃から日本の松山バレエ団と北京中央バレエ団は交流があり、1984年頃、松山バレエ団の北京公演があり、王先生と一緒に舞台稽古を見る機会がありました。それまでも松山バレエ団は何回か北京に来ており、その都度王先生がプリマドンナの森下洋子さんはじめ主要ダンサーには中国式の按摩整体術を行い、大変評判が良いと聞いていました。その王先生と一緒に稽古中の舞台の袖に行くのに誰もとがめませんでした。

7、8メートル先の舞台上では森下洋子さんと清水哲太郎さんが本番さながらに稽古をしていましたが、王先生の横にいた私がまさか日本人であるとは思わなかったかと思います。王先生の話では、森下洋子さんの足の甲は体の割に大変長く、それでトウシューズで立った時に美しく見えるのだと言っていました。公演本番も鍾潤良先生と見に行きましたが、切符は鍾先生が手配してくれ、私は無料で、しかも特等席で見ることが出来ました。当時、森下洋子さんは中国でも大変人気があり、彼女が舞台上で32回連続の片足での回転(グランフェッテ)をしたときには会場中で手拍子が起こりました。私も初めて松山バレエ団の公演を見て感動しました。

その後、ある日鍾潤良先生から学校の宿舎に電話があり、「海外バレエ団の公演の切符が手に入ったから取りに来なさい。」とのこと。当日鍾先生の自宅で切符を頂き会場に入ると、やはり席はど真ん中の特等席でした。席に座って開演を待っていると、なぜか全員が起立して拍手をし出しました。私も一緒に起立していると、私の2列前にその人物が座りましたが、すぐにその人物が当時の李先念国家主席であることが分かりました。私の一列前にいたのは警護の役人のようでしたが、私は国家主席の後頭部

だけが記憶に残っていて、どこの国のバレエ団かは忘れてしまいました。

### [中医研究院鍼灸研究所]

1984年9月に北京中医学院に入学し、3ヶ月間、毎日3時間、中国語での中医理論を学んでから、毎日のようにいろいろな病院の鍼灸科での臨床研修が始まりました。それと並行して、鍾潤良先生の口利きで、中国中医研究院鍼灸研究所で週2回ほど臨床研修をすることになりました。中国で最高レベルの鍼灸医学の研究所で、午前中は実際の患者の臨床治療で午後からは学術的な執筆や資料作りが行われる衛生部直轄の研究機関でした。そこでは地方の病院の鍼灸科で治らなかったような患者が多く来ていました。



中国中医研究院の院長はじめ幹部職員 20 名以上が参加し、私一人の為に歓迎会を開いてくれました。左の女性は通訳。

私は大体3ヶ月ずつ神経科、循環科、胃腸科で臨床研修をさせていただきました。特に一番長かった神経科では主任がドイツに出張中であつた為、副主任の王淑琴(ワン・シュウチン)先生が指導してくれました。彼女は私のどんな質問にも丁寧に、しかも便せん2枚くらいにサラサラと書いてくれたので、中医鍼灸の深い理解につながりました。今でも感謝しています。また彼女は、日本から来たスモン病患者を3人治療した経験があり、そのうち二人の患者はかなり症状が改善したと言っていました。

神経科では一冬に15人くらい顔面神経麻痺の患者が治療に来ましたが、王淑琴先生の治療で、そのほとんどが1~2ヶ月で良くなっていました。しかし地方の病院から紹介された一人の患者(50歳位の男性)だけは3ヶ月前から右顔面神経麻痺を患い、神経科でも週2回、一ヶ月ほど治療を受けたが一向に良くなりませんでした。そこで循環科主任の郭(グオ)先生に見てもらふことになりました。郭先生の一回目の治療は直接見させて頂きましたが、患側の右顔面には一切刺さずに、左顔面の何か所かのツボに対して1寸くらいのかかなり細めの中国鍼で回旋等の手技を加えながら5分ほど治療を終えました。中国で見させてもらった多くの鍼灸医の治療の中でも最も軽い刺激であつたかと思いますが、その時は特に変化はなく、私は内心この治療で治るのだろうか?と半信半疑でした。

ところが一ヶ月後にその患者が神経科に経過報告にやって来たのですが、だらりと下がっていた右顔面が左と同じくらいに張りが出てきており、左右区別が付かないほどに回復していて驚きました。健側のみを刺鍼する謬刺（びゅうし）法でしたが、さすがに人気のある名医である后感心しました。郭先生は一人で循環科の患者を午前中で20～30人治療していましたが、置鍼はせず1寸ほどの中国鍼で雀啄術や回旋術を用いながら一人の治療を5分～10分で行っていました。そうでなければ午前中の3時間で20～30人の患者を治療出来ません。当時日本では、中国の鍼治療は太い鍼でたくさん置鍼するという一面的な評価がありましたが、北京でいろいろな治療を実際に見て、それは正しくないと考えを改めました。

### 〔西城区中医医院鍼灸科〕

西城区中医医院鍼灸科の系寧（シー・ニン）先生も繆刺法をよく使う独特の技術を持った先生でした。北京中医学院からの臨床研修でしたが、私は技術だけでなく人柄も好きで、2ヶ月の研修のところを中医学院に頼んで3ヶ月に延ばしてもらいました。やはり人気があり、午前3時間の診療時間にもう一人の女医さんとともに30人くらいの患者さんを治療していました。

研修生は私を含めて3人ほどでしたが、患者を中国語で問診してカルテに診断と治療方針、そして使用するツボなどを書き込み主任の系寧先生に見てもらい、許可を得て実際に患者を治療するという流れでした。私は、治療に関する会話がある程度出来て外見も中国人と変わらないだけでなく、阿部治療室での4年半の臨床経験があり、他の留学生に比べて効率的に治療が出来たので、系寧先生も私に多くの患者を治療させたようでした。多いときは午前中に11名の治療をしたので研修生と言うよりも助手のようでしたが、ある日一緒に研修していたユダヤ系メキシコ人のレオンというドクターが系寧先生にクレームを言いました。それは、「私は今日3人しか治療していないが、村松は8人も治療している。これは不公平ではないですか？」と。系寧先生は謝って少しレオンの患者を増やしていたようです。

ある日、臨床期間を延長して私一人だけ研修していたとき、内モンゴル在住の30歳位の男性が友人二人に両肩を支えられて診療室に入ってきました。左の坐骨神経痛で、他の病院の鍼灸科で2ヶ



西城区中医医院鍼灸科での臨床研修。系寧先生（左）とメキシコ人留学生のドクターレオン（右）

月入院して鍼治療を受けていたが、痛みがますます強まり、左臀部の痛みで歩くことも出来なくなったので、系寧先生の評判を聞いて、友人に連れて来てもらったとのことでした。多分、2ヶ月間ずっと患部の左腰臀部ばかり鍼を打っていたので、左臀部が強い炎症を起こしてしまったようでした。

系寧先生はうつ伏せにさせた患者の左臀部を軽く触ると、それだけで声を上げてとても痛そうでした。「これは左梨状筋炎です。」と言って、左後頸部の天柱穴（太陽膀胱経、頭項髪際<sup>てんちゅう</sup>に在り、正中陥凹部の瘻門穴<sup>てんちゅう</sup>両傍）と左手掌の小指側にある後谿穴（太陽小腸経、第5中手骨頭の後方尺側<sup>こうけい</sup>）、そして左下腿の跗陽穴（太陽膀胱経、足外踝の上3三寸に在り、筋骨の間）<sup>ふよう</sup>に短めの鍼で置鍼して、軽く捻鍼術を加えた後、もう一度左臀部を押さえると先ほどの痛みが少し和らいでいました。その3カ所の穴に置鍼したまま、右臀部の対称点に3寸のかなり太い鍼でブスツと刺し、強めの雀啄術を施すとそのまま置鍼しました。

その状態で、系寧先生が触れるだけで痛がっていた左臀部を拳で強めに2、3回叩いても、患者は痛がる様子もないので、私はびっくりしました。そのまま20分程置鍼してから、鍼をすべて抜いて患者に立ってもらおうと、痛くないと言って自分で歩き出しました。帰りは自分の足で普通に歩いて帰りました。私が呆気に取られていると、「これは謬刺（ミュウ・ツウ）です。」と言われたが、その時はどんな漢字を書くのか分かりませんでした。そして、翌日、またその患者さんが診療室にやって来たのですが、一人でスーツを着て、お菓子を持って入って来ました。そして、「ありがとうございます。もう全く痛くありません。」と言って、その日は治療も受けずに、お礼のお菓子だけ置いて帰って行きました。

2ヶ月間、左臀部の痛みで苦しみ、入院していた患者さんが、たった20分の鍼治療で完治したことになります。この臨床体験は、2年間の北京留学を通じて最も印象に残っている出来事でした。

## [北京での武術修行]

私は北京留学前、新宿区で少林寺拳法東京大久保支部道場を運営し、また母校の神奈川大学少林寺拳法部の監督として少林寺拳法を指導していたこともあり、中国武術にも大変興味を持っていました。

### (太極拳)

北京語言学院では毎朝7時から張永良（ジャン・ヨンリヤン）という体育科の先生が簡化24式太極拳を指導してくれていたため、私も毎朝参加しました。太極拳は東京で習っていたこともあり、10月の運動会には30人くらいの留学生の先頭でパフォーマンスしました。最初は30人以上参加していた朝の太極拳も、冬が近づき北京の夜明けが7時過ぎになってくると参加者も徐々に減り12月には私を含め3人程になってしまいました。

た。特に欧米からの留学生は飽きっぽいなと感じました。12月からは残った留学生に張永良先生が呉式太極拳も教えてくれました。

2年目になり、私が北京中医学院に入学して数ヶ月後、語言学院で太極拳を指導してくれた体育科の張先生から食事に誘われました。そこには呉式太極拳の有名な王培生(ワン・ペイション)先生と、その弟子である劉長江(リュウ・チャンジャン)先生が同席していました。張永良先生は王培生先生の弟子でもあり、熱心に呉式太極拳を習っている日本の留学生がいるということで、私を呉式太極拳の王培生先生に引き合わせてくれたのでした。その時のご縁で1985年2月頃から、劉長江先生に個人的に呉



左から筆者、劉長江先生、王培生先生、張永良先生

式太極拳を習えることになりました。

劉長江先生との初めての個人練習は、北京中医学院から自転車で1時間ほどの北京大学の芝生の上で行いました。北京大学校内での個人練習は、帰国直前まで週2回ほど通いました。ある日、それまでに習っていた呉式簡化太極拳37式を指導してもらったあと、基礎的な推手を教えてもらいました。手合わせがあまりに手応えがないので本当に使えるのだろうかと思い、少林寺拳法の技を掛けてみたくなりました。そして「掛けますよ!」と言って、劉先生の片手を軽く掴みかなり本気に「片手 門 投げ」という技を掛けました。厳密に言うと掛けようとした時には、後ろに3メートルくらい飛ばされて、受け身をとって何とか後頭部を守りました。投げられたと言うよりも自分の力が自分に返ってきて、訳が分からず後ろに飛ばされながらもスローモーションのように劉先生を見ていました。劉先生は一步も動かず、手先がブルッと震えただけに

思えました。呆然としている私に向かって、「これは借力（ジェ・リー）です。」と何事もなかったように言いました。この日の夜、宿舎に戻り、「今まで習ってきた私の武術は何だったのか？」との思いで眠れませんでした。そして、この崩しの技術を取り入れれば私の少林寺拳法の技術は飛躍的に上達するであろうと確信しました。それから、劉先生のアドバイスで毎朝5時から7時まで呉式太極拳の基本練習を始め、それは私が帰国するまで続けました。特に北京の冬の朝5時というのは、まだ夜明け前で気温はマイナス10度～15度でしたが、終わった頃には毛の帽子を脱げば頭から湯気が出ており、下着もびっしょり汗で濡れていました。当時31歳の若さがあったからこそ出来た早朝練習であったかと思えます。

劉長江先生は元々の武道家ではなく、中国科学院動物研究所で鳥類の分類を専門とする研究者でした。おそらく文化大革命の時に、知識分子として地方の山奥に下放され、そこでの過酷な環境下で吐血する程の胃潰瘍を患い、北京に戻されたようでした。そこで健康を回復する為に始めたのが呉式太極拳でした。

劉先生は、呉式太極拳の鍛錬だけで健康を回復したと言っていました。北京の2月頃、マイナス5度の公園で練習していたときに、劉先生の手は手袋をはめていないのにもかかわらず、すごく暖かいのに驚きました。まさに治療家の手でした。劉先生は北京の気功医学の雑誌にも、「呉式太極拳の健身効果」というようなタイトルで論文を掲載していて、その後の私が気功治療家として成長していく「道しるべ」となってくれたと思っています。

### （棍術・長拳）

北京語言学院を修了間近の1984年5月頃、中国人の友人に誘われて北京市の武術競技会を見る機会がありました。そこでは、太極拳はもちろんのこと、形意拳、少林拳、八卦掌、劍術、棍術など多くの種目があり、どれもかなりレベルが高いパフォーマンスをしていました。その審判長席に座っていた陳家珍（チェン・ジャーゲン）先生をその友人が知っているというので大会終了後に紹介してもらいました。陳家珍先生は、北京体育大学の学生の時には全国大会に出場し、長拳等でかなり良い成績を収めた先生とのことでしたが、その当時は北京医科大学の体育教研室の主任をしていた40歳過ぎの先生でした。武術の国家級審判員で北京市の武術大会ではいつも審判長を務めているとのことでした。

私は、自分が日本人留学生で中国武術に大変興味があり、簡化24式太極拳は習っているが、是非少林拳や棍術を習いたいと直訴しました。まだ、劉長江先生に出会う前でした。そして、翌週から北京医科大学に通いました。自転車で30分ほどの距離でしたが、そこで基礎的な長拳と棍術を当初は週2回ほど指導してもらいました。陳家珍先生は、見るからに温厚で、武術家と言うより、正に学校の先生そのものでした。厳しい叱責などは一切なく、当時は珍しかった日本からの留学生に興味があったようで、

自宅にも招いてくれ、奥さんや二人の皆さんにも紹介してくれました。私が呉式太極拳に打ち込むようになってからはあまり練習に行く機会はなくなりましたが、帰国



北京医科大学の校庭で陳家珍先生が棍術や長拳を指導



棍術を練習する筆者  
(1984年夏)

まで断続的に私が自宅に出向いて、帰国後も手紙のやりとりはしていました。劉長江先生と陳家珍先生に共通しているのは、どちらも技量が抜群であるにもかかわらず温厚で教養があり、少なくとも私の前では、決して人を悪く言わない紳士であったことです。劉先生はよく、「人が担いでいる人を批判しない」と言っていました。つまり、たとえばある武道家の先生がいて、その人の素行、技量がいかに悪かったとしても、その先生の弟子の前では決してその人の悪口は言わない。それが「武徳」であると言っておりました。

中国人はプライドが高いので他人を評価するには特に注意が必要です。中国には「打人、不打臉」(ダーレン、ブダーリエン)という言葉があります。「人を打つにしても顔は打たない」、つまり「人に注意する、あるいは批判する場合でも、決してその人のメンツは潰さない。」ということです。この言葉は日本人に対しても当てはまり、今でも私の自戒の言葉として脳裏にきざまれています。

### [中医研究院鍼灸研究所所長]

北京での留学も終わろうとしていた1985年の6月頃、一人の日本人が北京中医学院に来て、日本人留学生に会いたいとのことでした。私が応対すると、彼は田中角栄元首相の娘さんと大学の時の同級生で、娘さん(田中真紀子さん)に頼まれて、脳梗塞の後遺症に悩んでいる元首相の為に、内密に腕の良い鍼の先生を招請したいとのことでした。鍼治療ではトップレベルの中医研究院鍼灸研究所で臨床研修している留学生は私だけだったので、私が中医研究院に掛け合ってくるといことになりました。後日、通訳もなく私一人で中医研究院鍼灸研究所の所長に面会を申し込み、拙い中国語で、元首相へ鍼医を派遣してほしいと頼んでみました。すると、「田中角栄元首相は中日国交正常化の恩人であるので何とか上層部に頼んでみましょう。」と言ってくれたので、その同級生の名刺等を渡しておいたのですが、この一件は帰国後には忘れてい

ました。しかし帰国後1年くらいして、中医研究院鍼灸研究所神経科のドイツに派遣されていた宋正廉（ツウオン・ジョンリエン）主任が日本に来て、一定期間、目白の田中邸に往診したらしいということを目にしました。中医研究院鍼灸研究所の所長が私との約束を守ってくれた事に対し、内心とてもうれしく思いました。

### 〔修学旅行〕

1985年の7月には北京での留学期間が終了したのですが、6月後半から3週間かけての北京中医学院が企画した留学生だけの修学旅行がありました。クラス全員が参加出来、しかも旅費は授業料に含まれているとのことでした。その頃、私は週3回中医研究院鍼灸研究所の神経科で臨床研修を続けており、呉式太極拳も週3回、北京大学まで自転車で走り、劉長江先生との個人練習を続けていたので、帰国間際のその3週間が大変もったいなく思いました。結局私一人だけ修学旅行には参加せず、北京中医学院に残り、研修を続けることに決めました。毎朝5時からの基本練習は続け、北京大学に行かない日の午後には北京中医学院の校庭で一人、呉式太極拳を練習していました。また、妻子を日本に置いて勉強に来ているので、帰国開業の為、中医研究院鍼灸研究所での臨床研修を少しでも長くしたいとの思いからでした。

### 〔鹿児島での開業〕

1985年8月に妻子の待つ鹿児島に帰ってきました。留学でお金を使い果たし、とにかく働かないといけないので2ヶ月間は義父が経営する自動販売機のジュース入れやハンバーガー作りの手伝いをしました。そして10月の終わりには、倉庫だったところを改装してベッド1台、中古の長椅子1台の仮治療院を作り、新聞に広告を一回入れただけで開業しました。最初の1,2ヶ月は妻の親戚が義理で治療に来てくれましたが、一人も患者さんが来ない日もありました。暇な日は治療室の空きスペースで太極拳の基本功をしながらひたすら治療関係の本を読んでいた。

翌年の10月には、義父に保証人になってもらい、義父の土地に自宅を兼ねた鉄筋二階建て60坪の治療院を建設しましたが、怖いもの知らずでした。毎月の返済額は30万円近くにもなり、当時年8.3%の金利以外は経費で落ちないこともその時知ったくらいで、金融には全く無知でした。建設費用はなんとか返済したものの、その後県外の私大に進んだ二人の娘への仕送りや新しい治療院の内装費など借り直しが多く、未だに借金は無くなりません。それでも、「借金も財産のうち、今まで通り何とかなるさ！」と今は楽観しております。

### 〔実践経営塾〕

鹿児島に帰ってからも勉強は続けておりましたが、平成20年（2008年）に始めた「実践経営塾」は今でもほぼ毎月行っております。塾を始めたきっかけは平成19年に

鹿児島鍼灸専門学校で何かの講演をしたことが縁で、学級委員の3年生の男女二人が治療院を見学に来ました。12月だったかと思いますが、学級副委員長だった女性が、「左膝の裏がずっと痛いんです。」というので、奇経を使って接触鍼で3分ほど気を通すと、すぐに痛みが取れました。するとその女性は、「へえ！鍼って効くんですねえ。」と感動したかのように言うのを聞いて、私はほんとうに驚きました。あと、2ヶ月ほどで鍼灸の国家試験を受けるという3年生が今頃鍼の効果に驚くという現実には唖然としました。私が鍼灸学校3年生の頃は、往診だけで生活費を稼いで自活していたことを考えると、何とかしなければいけないと思い、翌年4月から、「鍼灸・気功・整体、実践経営塾」を開講しました。その二人は現在大分市と鹿屋市で開業して成功していますが、今年度も毎月大分と鹿屋から参加しています。現在塾生は土、日コース合わせても12名と多くはありませんが、県外からも4名参加しています。



鍼灸・気功・整体「実践経営塾」での研修風景

私は開業当初から後進を育てたいという事で比較的研修生を受け入れていました。将来治療家として成功したいと思うのなら、まず治療技術を学び取るということが最優先であると思うのですが、給料も欲しいし技術も教えて欲しいという学生とか、無料で見学したいという学生が多いですが、どちらもダメです。私のところで研修してから開業し

て十分成功している治療家は5、6名ほどいるかと思いますが、どうしても研修して技術を身に付けたいという強い意気込みを持った人たちであったかと思いますが。無給であったことはもちろんですが、皆勤務開始時間の20分前には治療室に来て言われなくても掃除をしていました。雑用をしながらも、絶えず私の技術を盗み取ろうとする姿勢がある人たちでした。そのような熱心さがあるので私も自分の技術を積極的に教えました。彼らは、無給の見学者ではなく、よく働く無給の従業員でした。

### 【気功研究会】

実践経営塾を開講する少し前の平成17年(2005年)、私は「鹿児島武術・医療気功研究会」を立ち上げ、月に1回だけ気功教室を開くことになりました。最初の動機は、武道経験者と共に劉長江先生から教えていただいた脱力や崩しを研究する為でした。ところが、武道経験者は徐々に減り、治療家や一般の女性が増えてきて、武道的な崩

しの研究よりも、気功治療の方に重点が移ってきました。現在では私が考案した「気功柔軟法」で心身を緩めた後、気功治療をするための訓練をする一般クラスと、脱力や崩しを研究する武術経験者のクラスに分けて、月2回の講習を続けています。

気功治療に関しては、元々興味を持ってはいましたが、留学前には中国人のするような気功治療が自分で出来るようになるとは思っていませんでした。しかし、留学中に劉長江先生の手の温かさや気に対する感覚の鋭さにあこがれ、帰国後も公園で一人訓練するうちに少しずつ気に対する感覚が鋭くなっていきました。そして、20年程前から、本格的に自分の治療に取り入れてきました。

今では、後述するように指先から気を出して身体や脳、自律神経の調整が出来るようになってきました。この私自身の経験から、気功治療は一部の特殊な才能を持った人だけが出来る特別なものではなくて、正しい訓練によって誰もが出来る治療法であると確信しました。

実際に初めて気功教室に参加する方でも、気功柔軟法を40分ほどかけてから気を出す訓練をすれば、発気する気の量に違いはあるものの、簡単な気功治療が誰でも出来ることは証明されています。



気功教室での講習風景

## 〔鹿児島での再会〕

北京から鹿児島に戻ってきてから、今日まで38年が経過していますが、私は仕事に追われ一度も中国はじめ海外に行く機会はありませんでした。しかし、中国でお世話になった先生方のうち、3名の方たちと鹿児島で再会する機会がありました。

一人目は鍾潤良先生です。帰国後もずっと手紙や電話、ファックスなどで連絡は取り合っていました。私が帰国後10年目の1995年12月に、鹿児島バレエ研究所が鍾潤良先生を鹿児島に招いて一ヶ月間特別講習をすることになり、その招請事務を私がお手伝いしました。私は時間の取れる限り講習に参加し通訳を致しましたが、毎晩のように鍾先生を自宅に招いていろいろバレエ指導のことを伺いました。

自宅での会話の中で特に印象に残っていることは、来日時、鍾先生は北京舞踏学院の教師でありましたが、6年制の「国立北京舞踏学院」の卒業生は各地の舞踊団に所属してプロのバレエダンサーとして活動する人たちであるとのこと。故に、6年生には当然優秀な教師が担任することになりますが、それ以上に優秀なベテラン教師が1年

生の指導に当たるとのことでした。当然正しい基礎を身に付けさせる為ですが、それ以上に大切な任務は入学したばかりの生徒たちにバレエが本当に好きになってもらうことであると言っていました。バレエが好きで好きでたまらなくなれば、自分から厳しい練習に励むようになるということでした。

鍾潤良先生は、1997年に、おそらく中国で最初の民間のバレエ学校となった4年制の「北京潤良舞踏芸術学校」を設立し、初代校長に就任し、ご主人も芸術総監督として学校運営に携わっていました。「潤良舞校」設立3年目の2000年には、ドイツで行われた国際ジュニアバレエコンテスト

において、北京代表として参加した3名の教え子が3名共、各部門で一等賞を獲得するという快挙を達成しました。現在はご夫婦ともに退職し、ドイツ人と結婚した娘さんの住むドイツに在住しているようです。

二人目は、劉長江先生です。帰国して21年後の2006年8月に堀眞也さんと共に鹿児島を訪れました。堀眞也さんは、私の後、北京に留学し、劉長江先生に付いて本格的に呉式太極拳を習った人ですが、元々中国語が堪能で、東京で陳式太極拳も学んでいました。帰国後も年に

2回くらい北京を訪れて劉長江先生の太極拳技法を学んでおり、彼が東京に劉先生を招いた折り、鹿児島まで劉先生を連れてきてくれました。私が、劉長江先生から直接呉式太極拳を学んだ1番目の日本人であるから、どうしても連れて行きたかったと言ってくれました。鹿児島には三日間ほど滞在され、その間、私が主宰している気功教



「潤良舞校」で生徒にレッスンする鍾潤良先生 (58歳頃)



ドイツで行われた「国際ジュニアバレエコンテスト」で一等賞を受賞した教え子たちと「凱旋祝賀会」に出席

室で気功や呉式太極拳について講義してもらいました。堀さんにはご自分の体験を踏まえた正確かつわかりやすい通訳をしていただきました。



鹿児島武術・医療気功研究会で推手を指導する劉長江先生



堀真也さん（左）と劉長江先生

三人目は、陳家珍先生です。2015年頃、ご家族での船旅で、釜山経由九州巡りのツアーで来日されました。鹿児島にも一日だけ停泊すると前もって手紙を頂いており、鹿児島の港に迎えに行きました。実に30年ぶりの再会ですので、すぐには分かりませんでした。画家であった奥さんと、留学時は小学生であった娘の陳芳（チェン・ファン）さんは小学生の娘さんと一緒に、4人連れの旅でした。陳家珍先生は相変わらず物静かで、奥さんがその倍は話す以前と変わらぬご夫婦でした。昼食を共にしましたが、麺が食べたいと言うので、鹿児島のラーメンを皆で一緒に食べ、4人とも満足したようでした。私は帰国後も、毎年、年賀状を送っていて交流を続けていました。こうして30年後に再会して談笑する機会を持つことが出来たことは本当に幸せでした。

### [私の治療法の変遷]

私が東京にいたときには、当然、阿部昇弘先生直伝の整体術が治療の中心でした。しかし東洋鍼灸専門学校在学中、経絡治療の大家であった山下詢先生は恩師であり、しかも山下詢先生が主宰する研究会にも2年間通っていたこともあり、それで経絡治療で脈を整え自律神経を安定させてから整体術を施すことも多かったかと思えます。

中国から帰国後は、北京での臨床体験を踏まえ中医学的な診断をして主に腰背部への置鍼をして体を緩め、免疫力を高め、最後に整体術を行うことが多くなりました。しかし20年ほど前からは気功鍛錬によって得られた気の感受性や発気感覚が強まってきて、次第に気功治療の割合が多くなりました。その後の臨床経験から、手足のツボに鍼を打つ代わりに指先から気を出して、脈状の乱れや骨盤の歪み、体各部の圧痛を同時に解消する「ゆびばりによる奇経、正経調整術」を編み出しました。この技術を高め、今では頸椎や頭蓋骨などの骨の歪みにも指先から気を発するだけで調整する

ことが出来るようになりました。現代は冷え性の人が多いので、その場合には腰背部に浅く置鍼をして、遠赤外線で体の芯まで温補して免疫力を高めます。その後、必要があれば更に鍼を打つこともありますが、最後は軽い気功整体術で整えて治療を終えます。また、高校生以下の患者さんには一般的に鍼を打つことなく、気功整体術だけで体を整え、痛みを取るようになっています。

私は、毎日の臨床を通じ、より良い治療法を探して試行錯誤を繰り返しているので、この治療で完全ということではなく、今後も治療を続けて行く限り治療法も少しずつ変わっていくかと思います。

## 【おわりに】

古稀を迎える年齢となり、やっとな精神的にも楽になって来ましたが、70年に及ぶ人生を振り返れば、この文章には書かれていませんが、十分過ぎるほどの失敗も重ねてきました。失敗しようと思って失敗する人はいないかと思いますが、よかれと思ってしたことが上手く行かず、自分自身が辛い思いをするだけでなく、心ならずも相手を傷つけてしまうこともあったかと思います。しかし、その失敗の原因を考え、反省することが出来たなら、その失敗は人として一段賢くなるための貴重な経験となります。その後の人生を送る上での財産ともなります。そう考えれば後悔の念は軽くなり、心も少し楽になる気がします。

『過去は変えられないが、過去の意味を変えることはできる。』という言葉が聞かれました。失敗の多い人間にとって救いとなる言葉かと思います。

人が健康で長生きするためには、体の養生をするだけでなく、生きる目的、生きる楽しみが必要です。心からやりたいと思うことに向かって積極的に自分から動けば、必ず良い巡り会いがあると確信しています。

70歳は私の人生の通過点だと思っています。これからも心からわくわくすることを探して、若者のような気持ちを持った治療家として生きていきたいと思っています。

2023年3月吉日



筆者近影

#### 筆者略歴

1953 年生まれ 静岡県出身

1976 年 3 月 神奈川県 神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業

1979 年 3 月 東洋鍼灸専門学校本科卒業

1979 年 4 月～1983 年 7 月 東京築地の阿部治療院に勤務

1983 年 9 月～1985 年 7 月 中国北京留学

1985 年 10 月 鹿児島市にて開業、現在に至る

按摩マッサージ指圧師、はり師、きゅう師

## 村松鍼灸院

〒891-0141 鹿児島市谷山中央3丁目 4,601-1

TEL 099-269-7498

《ホームページアドレス》 <http://www.mura-shinkyu-kagoshima.com>

『村松鍼灸院、鹿児島』で検索